



真言宗豊山派 金剛山 長谷寺

由緒・沿革

宝暦九年（1759）、十四世亮海和尚の誰した当寺の「縁起及沿革」によると、天長年中（828～833）、宗祖弘法大師が羽黒・湯殿の陰魔を降伏するため、この地の金剛山に住まわれたのが始まり言われています。

その後、一時広智寺と称したとも伝えられ、永徳年中（1381～1383）に法印定善によって新義真言宗常法壇林所が開かれ長谷寺と改称して再興されましたが、のち乱世の時代にあって変遷があったものと考えられており、往時の由緒は明らかではありません。

元和五年（1619）上杉家臣志田修理大輔房義が相馬から法印宥濟を招き、亡父兵部大輔義清の菩提のため旧跡に金剛山長谷寺を再建しました。元和七年（1621）上杉藩から領高五拾石の御里印が下附されて祈願寺となり、元禄年中（1688～1703）八世宥言和尚が諸堂の建立、梵鐘の造立など七堂伽藍が整備されて、このとき松平出雲守

（梁川藩）の祈願寺になっています。「伊達・信夫寺社修驗録」によると、長谷寺は伊達西根・東根六十六郷小手庄における真言宗の縁本寺で、末寺の数は三十四ヶ寺の記載がみられます。

当寺は、三度の火災に遭遇しており、十一世音宥順和尚の享保十四年（1729）には栄華を誇った七堂伽藍はことごとく焼失してしまいました。ただちに本堂の再建がなされ、十四世亮海和尚は金剛界五仏（大日如来・阿彌陀如来・宝生如来・阿弥陀如来・不空成就如来）をはじめ両界曼荼羅や經典、法具なども備えましたが、その後、慶応二年（1866）、明治九年（1876）の火災で殿堂・法具・古記録類など多くの貴重な什物を失ってしまいました。

現在の本堂は、明治十六年（1883）から三年の歳月をかけて完成されました。正面八間、側面七間入り母屋造り木端葺きで、本堂を一巡する回廊が取り付けられ、唐破風の向拝と本堂欄間に豪華な彫刻が施されています。

風船工房 MORITTOが贈る笑顔と元気、
バルーンアートでみんなをしあわせに



★本日のプログラム★

- ◆もりっ人のるんるん♪バルーン教室
(風船工房MORITTO)
- ◆バルーンアート体験
(抱っこして♥くまちゃん♥製作)



■キッズイベント

- ◆（屋外）
「ヨーヨー釣り」
「アイスクリーム」



※写真はイメージです